

高校生のボランティア学習レディネスに関する一考察 : 3年間の経年変化に着目した検討(人間社会研究科)

著者	林 幸克
雑誌名	大学院紀要 = Bulletin of graduate studies
巻	56
ページ	201-217
発行年	2006-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020687

高校生のボランティア学習レディネスに関する一考察 － 3年間の経年変化に着目した検討 －

人間福祉専攻

博士後期課程 2年 林 幸 克

I はじめに

1 問題と目的

ボランティア元年とされる1995（平成7）年の阪神・淡路大震災以降、日本におけるボランティア活動への注目は高まるばかりである。市民活動の面では、1998（平成10）年から施行された特定非営利活動促進法（NPO法）によって、市民活動団体が質・量もとに拡大し、NPO（法人）が広く社会に浸透するまでになった。また、教育活動の面では、2000（平成12）年の教育改革国民会議の最終報告以来、学校教育・社会教育などの分野で、子どもを対象としたボランティア活動が積極的に展開されるようになり、今日に至っている。

2005（平成17）年度の文部科学省における奉仕活動・体験活動の推進に関する主な施策をみると⁽¹⁾、地域ボランティア活動推進事業（地域の教育力の再生を図るため、地域におけるボランティア活動促進のための多彩なプログラム開発を行う事業を実施し、ボランティア活動の全国的な展開を推進する）、ボランティア活動広報啓発・普及事業（国民一人一人が、日常的にボランティア活動を行い、相互に支え合える地域社会を実現するため、ボランティア活動推進フォーラムの開催や広報啓発・普及事業を実施し、地域社会全体でボランティア活動を推進していく気運の醸成を図る）、青少年の自立支援事業（青少年が自立した人間として成長するために、青少年の主体性・社会性をはぐくむ社会体験活動、自然体験活動等の体験活動を実施する）等が挙げられる。また、学校における体験活動の2003（平成15）年度の実施状況では⁽²⁾、高等学校が平均34.5単位時間となっている。現在の学校教育は、年間35週間という想定で教育課程を編成しているため、おおよそ毎週1単位時間の体験活動に取り組んでいることになる。その時間の内訳では、勤労生産・職業・就業体験（第二次産業関係）の7.3単位時間が最も多く、以下、生産・職業・就業体験（第一次産業関係）（6.6単位時間）、生産・職業・就業体験（第三次産業関係）（5.1単位時間）、社会奉仕体験（3.0単位時間）、芸術・文化体験（2.8単位時間）、自然体験（2.6単位時間）、交流体験（1.9単位時間）となっている。このほかにも、各自治体やNPO等が主導している事業もあれば、学校教育のみならず、社会教育やそれを含めた地域社会主導で展開されている活動も数多くあると思われる。

このように見ると、ボランティア活動への関心が高まり、法律の改正や様々な施策の実施等により、その学習支援環境・体制は充実・整備されつつあることは明白である。ただ、ボランティア活動を良いもの、教育的効果のある活動として、無批判に受け入れている側面があるのではないかと危惧する。また、ボランティア活動に取り組めば、すぐに望ましい変化・効果が表れる「万能薬」としてボランティア活動を捉えている側面もあるのではないと思われる。例えば、国立淡路青年の家が2泊3日で行った高校生のためのボランティア活動セミナーでは、出会いやつながり、コミュニケーションの大切さを学んだという報告がされていたり⁽³⁾、東大阪市ボランティアセンターが一般のボランティア参加者を対象に行った調査では、ボランティア活動をしていて感じることで、友達ができたり感謝されて感激すること、思いやりの気持ちが深まることが上位に挙げられている⁽⁴⁾。あるいは、国立オリンピック記念青少年総合センターの調査では、1泊2日のボランティア学習プログラムを通して、ボランティア活動には多くの内容があることや、それを取り巻く課題への理解が深まったという報告がされている⁽⁵⁾。これが全てではないが、青少年教育施設やボランティアセンター等の報告書には、これらと類似した結果が示されることが多い。こうした結果は結果として示すことは重要なことで、主催事業等の自己点検・評価という側面から考えても不可欠なものであると思われる。しかし、これを安易に一般化して捉え、ボランティア活動には教育的効果があり、非常に有用であると結論づけるのは早計である。国立淡路青年の家や東大阪市ボランティアセンター等に限らず、夏休み等を活用して実施されることが多いボランティアセミナーやボランティ

研修等を見ると、一連のプログラム終了後に参加者にアンケートをとるなどして、その学習効果を検討している場合が多い。しかし、そういったボランティアセミナーやボランティア研修等の参加者は、もともとボランティアに興味・関心があり、ある程度ボランティアに対する意識の高い場合が多い。そのため、その参加者がボランティアに関する理論的・体験的学習を通して、自分自身や他者に対する理解、あるいは社会全体への理解が深まるのは、ある意味で然るべきではないかと思われる。ボランティアに対する意識は高いものの学習機会がなかった学習者に対して学習刺激を提供すれば、それによって好ましいと思われる変化が生じるのは肯けるところである。

しかし、先述したようにボランティア活動は「万能薬」ではない。短期的な学習プログラムによって変化が現れる側面もあれば、中期的・長期的な視野に立つて捉えなければ変化が見えない側面もあるはずである。すなわち、活動後すぐには、その効果や変化が表れなくても、数ヵ月後・数年後、または忘れた頃に不意に表れる場合も想定できる。あるいは、いくら時間が経過しても変化しない側面もあるかもしれない。さらにいえば、ボランティアセミナーやボランティア研修等を受けなくても、加齢等による発達段階に伴って自然と変化する側面もあるのではないかと考えられる。無意識のうちにボランティア活動は「万能薬」であるという認識に立つあまり、ボランティア活動の効果を比較的短期的に捉える傾向が強くなり、発達段階による変化の検証が十分であったとはいえない。

2 レディネスの概念

本研究では、レディネスという概念が重要になる。そこで、本論に入る前に、レディネスについて触れておく。

レディネスとは、「ある行動の習得に必要な条件が用意されている状態」と定義される。ここでいう「ある行動」とは、階段昇りやボタンはめ、自転車乗り、スキーなどの主に運動機能によるものから、算数や文字の読み書き、種々の概念形成などの知的機能までが含まれている。また、「必要な条件」には、身体や神経等の成熟や既存の知識や技能、興味・関心や動機まで含まれる⁽⁶⁾。レディネスという用語は、ソーンダイク(Thorndike, E.L.)によって、「レディネスの法則」として使われた。この法則は、「結合が活動する準備があるときには、活動することは満足を与え、活動しないことは不満足を与える。活動する準備のない結合が活動するときには不満足を生ずる。」というものである。つまり、活動・学習しようとする準備の出来ているときには、準備のないときよりも、いっそう能率的に活動・学習し、大きな満足を感じるが、活動・学習しようとする準備の出来ているときに、それを阻止されると不満足を感じるというものである。このレディネスの概念は、精神的構えであり、身体的成熟は含んでいないと考えられている⁽⁷⁾。

レディネスに関する古典的研究では、階段昇りやボタンはめを成熟前に訓練しても、それらの技能の発達は促進されず、むしろ妨害さえみられたという。すなわち、ある行動の習得には早過ぎる学習(訓練、経験)は効果がなく、たとえあったとしても一時的であるという適時性と、また、遅過ぎる学習も効果がないのであって、学習にはもっとも適した時期(最適期)があるというのである。これに対し、1950年代以降は、成熟待ちの発達観や教育観への批判が高まり、教育によって発達やレディネスを促進することができるという方向に動いている。つまり、学習・教育・文化等を重視する発達観が優勢になりつつあるのである⁽⁸⁾。現代の一般的見解としては、発達は成熟と学習との相互作用によって進行するとされているが、成熟と学習のどちらの要因に重きを置くかは、研究者によってかなり違いがあるのが実情である⁽⁹⁾。

3 ボランティア学習とレディネス

レディネスを本研究に即して捉えると、高校生がボランティア学習に臨むための準備的な構え及び適応状態であるといえる。通常、レディネスに関する研究は、障害児教育や乳幼児教育の可能性、職業や就業、進路との関連、メディアリテラシーの育成のような特別な教育の実践との関わりで展開されることが多かった⁽¹⁰⁾。すなわち、対象とする教育・活動内容が一般的ではなく、どちらかといえば特殊な場合が取り上げられやすかった。

しかし、それらに共通しているのは、「学習の適時性」であると思われる。その「学習の適時性」に着目するならば、高校生のボランティア学習をレディネスの観点から捉えて、分析・考察することは有意義なことであると考えられる。先述したように、ボランティア学習の重要性や教育的効果に関して、それが十分に吟味・実証され

ないままに先行するあまり、ただやみくもにボランティア学習に取り組めばいい、ボランティア学習をすれば望ましい変化が生じるはずであるといった、ある種の“思い込み”が見受けられることがある。それをすべて否定するつもりはないが、諸手を挙げて賛同することもできない。一言でボランティア学習と言っても、その分野・領域は多種多様であり、同じ分野・領域でも、専門的な知識・理解を深める内容であるのか、あるいは、それを踏まえた上で実践される技能・技術を高める内容であるのかによっても学習の展開は異なって然るべきである。また、その対象である学習者の興味・関心や経験等の状態を勘案すれば、さらに複雑な展開及び配慮が求められるかもしれない。その状態、すなわち学習レディネスを明らかにし、それに応える内容の学習を進めなければ、効果的な学びは成立し難いのではないかと思われる。

以上のことから、ボランティア学習を行う上で、レディネスを吟味することは必要不可欠であると考えられる。そのため、高校生が1年生から3年生へと心身両面において成熟していく過程において、どのようなレディネスにあり、それに対して、具体的にどのようなボランティア学習が適しているのか、3年間の経年変化を分析しながら、ボランティア学習に取り組む時期とその内容を検討することは重要である。本稿では、レディネスを、高校生のボランティア学習を進める際の学習の適時性を捉える観点として位置づけ、ボランティア学習に臨むための構えであり、適応性であるとする。そして、ボランティアセミナーやボランティア研修等に参加していない高校生が、1年生から3年生までの学年進行に伴って、ボランティアに対する意識・実態にどのような変化をみせているのかを明らかにすることを目的とする。それを踏まえた上で、効果的に高校生のボランティア学習を進めるための提言を行う。

Ⅱ 方 法

1 調査対象

埼玉県内の県立高等学校3校⁽¹⁾の高校生1,044名を対象に無記名式質問紙調査を行った。

2 調査時期・内容

調査時期・内容等を表1に示した。なお、調査対象は同一であり、3年間4回の追跡調査を実施した。

表1 調査時期・内容

回	時期	対象学年	母集団(人)	回収数(人)	回収率(%)	調査内容
第1回	2002年5月	1年生	1,044	1,005	96.3	性別、所属学科、中学時代の所属部・クラブ、高校入学までに体験したボランティア(23項目)、ボランティアに取り組みやすい人数、ボランティア学習レディネス(29項目)、自由記述(ボランティアから連想すること)
第2回	2002年11月	1年生	1,044	971	93.0	性別、ボランティア学習に適した時間(5項目)、ボランティア学習でできるようになること(17項目)、ボランティア学習レディネス(29項目)、自由記述(高校入学後のボランティア体験)
第3回	2003年11月	2年生	1,044	941	90.1	性別、ボランティア関連情報の収集方法(12項目)、ボランティア学習に適した時間(6項目)、他者からの影響(10項目)、ボランティア学習レディネス(29項目)、自由記述(ボランティアする際の障害・問題)
第4回	2004年11月	3年生	1,044	896	85.8	性別、高校入学後に体験したボランティア(23項目)、ボランティア評価(6項目)、ボランティア学習レディネス(29項目)、自由記述(ボランティアから連想すること)

本研究では、これらの調査内容の中から、4回の調査に共通して用いた「ボランティア学習レディネス」を中心に分析・考察を進める。

3 調査項目の選定

「ボランティア学習レディネス」29項目の選定については次のような手続きをとった。

国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、国立青少年教育施設の専門職員を対象に、1999（平成11）年から2000（平成12）年にかけて合計3回、「主催事業の評価方法に関する研修会」を実施した。この研修会の目的は、第1には参加者が調査方法の基礎を会得することであり、第2には参加者の事業企画経験を調査票づくりに活かしてもらい、調査項目を検討することであった。1999（平成11）年の第1回研修会で作成した調査票に基づき、1999（平成11）年度の青少年教育施設が主催するボランティア事業で実際にデータ収集を行い、そのデータについて因子分析を中心とする統計処理を行った。

その結果を踏まえて、青少年教育や生涯教育を専門とする研究者や実践者の助言を受け、それらを参考にしながら項目内容を再検討した。それを経て、研修会を通して変容が見られると思われる他者への接し方、野外活動等の活動の具体的な知識・理解、リーダーとしての自覚・自信、国際化への対応、自己実現への意識等の29項目を決定した⁽¹²⁾。なお、筆者は一連の研修会に主催者側として関わるとともに、調査項目の策定について指導・助言を与える立場にあった。

こうして開発した効果測定尺度（29項目）は、ボランティア研修会の効果を検討するために開発された項目であるが、信頼性、妥当性ともに検討されており、本研究にも十分適用できるものと判断し、ボランティア学習レディネスとして採用した。なお、尺度の名称が「ボランティア研修会の効果測定尺度」となっているが、青少年教育施設における事業評価を測定する尺度を開発するという経緯からそうした名称になっている。そのため、尺度内容そのものに関しては、高校生のボランティア学習レディネスの測定にも適当であると判断した。また、それに関連して、「ボランティア研修会の効果測定尺度」は、ボランティア研修に参加する高校生等を対象にしたもので、ボランティア研修という場で回答していない本研究の調査対象である高校生の場合とは、各項目の得点や因子構造は異なってくることが推察される。したがって、その異同を確認する意味でも、改めて因子分析等の分析を行った⁽¹³⁾。

4 調査方法

調査の実施方法に関しては、教頭先生を窓口として、調査票を学校（ホームルーム担任）経由によって一定期間留め置き、生徒に回答を求め、後日回収する方法をとった。

Ⅲ 結果

1 回答者の内訳

回答者の内訳を男女別に示した（表2）。

表2 回答者の内訳

(上段:人数, 下段:%)					
	男子	女子	小計	無回答	合計
第1回調査	511 (50.8)	494 (49.2)	1,005 (100.0)	0	1,005
第2回調査	437 (49.8)	441 (50.2)	878 (100.0)	93	971
第3回調査	370 (49.9)	371 (50.1)	741 (100.0)	200	941
第4回調査	352 (49.9)	354 (50.1)	706 (100.0)	190	896

第1回調査から第4回調査まで男女比は、概ね1:1でほぼ同じ割合であった。また、対象とした3校について、学校間で人数に極端な偏りはみられず、また、ボランティア学習レディネスに関する学校間の得点分布に大きな差はなかったことを付記しておく。

2 ボランティア学習レディネスの変化—項目レベルでの検討—

ボランティア学習レディネスに関する29項目は5件法の尺度であり、データ入力に関して、「きわめてあてはまる」を4点、「かなりあてはまる」を3点、「わりとあてはまる」を2点、「少しあてはまる」を1点、「あてはまらない」を0点として得点化した。

これをまず、項目レベルで検討する。項目ごとに、「きわめてあてはまる」、「かなりあてはまる」と回答した人数の合計とその割合及び平均点と標準偏差を示した(表3)。この中の平均点に着目して、得点が高い順にグラフで示した(図1～図4)。

2002年5月調査をみると、得点の高かった項目は、「人の意見に耳を傾けることができる」(2.19点)、「子どもに対してやさしく接することができる」(2.13点)、「高齢者に対してやさしく接することができる」(2.00点)であった。他方、得点の低かった項目は、「生涯学習ボランティアについてよく知っている」(0.38点)、「海外のボランティア事情について理解がある」(0.52点)、「ボランティア関連事業を企画・運営する自信がある」(0.57点)であった。

2002年11月調査では、「人の意見に耳を傾けることができる」(2.29点)、「子どもに対してやさしく接することができる」(2.25点)、「高齢者に対してやさしく接することができる」(2.12点)、「ボランティア活動は自分の成長に役立つと感じる」(2.08点)、「人の喜びを自分の喜びとして感じるることができる」(2.07点)の項目の得点が高かった。反対に、「生涯学習ボランティアについてよく知っている」(0.91点)、「海外のボランティア事情について理解がある」(0.96点)、「ボランティア関連事業を企画・運営する自信がある」(0.96点)の項目の得点は低かった。

2003年11月調査では、「子どもに対してやさしく接することができる」(2.04点)、「人の意見に耳を傾けることができる」(2.02点)、「高齢者に対してやさしく接することができる」(1.92点)で高い得点を示した。「生涯学習ボランティアについてよく知っている」(0.51点)、「ボランティア関連事業を企画・運営する自信がある」(0.64点)、「環境保護・保全についての知識・技能に自信がある」(0.66点)では得点が低かった。

2004年11月調査をみると、得点の高かった項目は、「人の意見に耳を傾けることができる」(1.94点)、「子どもに対してやさしく接することができる」(1.86点)、「人の喜びを自分の喜びとして感じるることができる」(1.79点)であった。「生涯学習ボランティアについてよく知っている」(0.44点)、「野外活動についての知識・技能に自信がある」(0.58点)、「環境保護・保全についての知識・技能に自信がある」(0.61点)の項目では得点が低かった。

4回の調査を通して、「人の意見に耳を傾けることができる」や「子どもに対してやさしく接することができる」、「高齢者に対してやさしく接することができる」といった“対人関係”に関わる項目が、常に高得点であった。逆に、「生涯学習ボランティアについてよく知っている」や「ボランティア関連事業を企画・運営する自信がある」、「海外のボランティア事情について理解がある」といった“専門的な知識・理解や技能”に関する項目は得点が低かった。これらの項目も含めて、高得点・低得点を示す項目の全項目中の相対的な配列そのものに大きな変化はなかったが、その得点の変化にはやや違いがみられた。2002年11月調査は、他の3回の調査結果と比較して、29項目すべてで最も高い得点を示した。この2002年11月調査の得点をピークにして、2003年11月調査では得点が下がり、2004年11月調査は、2003年11月調査と同程度か、さらに少し減少する傾向にあった。なお、2002年5月調査は、2003年11月調査の結果とほぼ同様であった。

表3 ボランティア学習レディネスの変化(全体)

(4点満点)

	2002年5月調査		2002年11月調査		2003年11月調査		2004年11月調査	
	「きわめてあてはまる」+「かなりあてはまる」 (上段:人数, 下段%)	平均点 (標準偏差)	「きわめてあてはまる」+「かなりあてはまる」 (上段:人数, 下段%)	平均点 (標準偏差)	「きわめてあてはまる」+「かなりあてはまる」 (上段:人数, 下段%)	平均点 (標準偏差)	「きわめてあてはまる」+「かなりあてはまる」 (上段:人数, 下段%)	平均点 (標準偏差)
(1) 環境保護・保全についての知識・技能に自信がある	26 (2.6)	0.61 (0.83)	109 (11.4)	1.19 (1.11)	29 (3.1)	0.66 (0.85)	37 (4.1)	0.61 (0.90)
(2) 他者に奉仕することは自分の人生を充実させる	153 (15.3)	1.44 (1.10)	271 (28.1)	1.85 (1.16)	179 (19.3)	1.56 (1.14)	181 (20.2)	1.47 (1.25)
(3) 生涯学習ボランティアについてよく知っている	14 (1.4)	0.38 (0.67)	83 (8.6)	0.91 (1.05)	21 (2.3)	0.51 (0.77)	18 (2.0)	0.44 (0.77)
(4) 自分の知識や技術を誰かに伝えたいと思う	111 (11.1)	1.12 (1.11)	195 (20.3)	1.51 (1.21)	102 (11.1)	1.13 (1.11)	118 (13.3)	1.11 (1.20)
(5) 人の意見に耳を傾けることができる	334 (33.4)	2.19 (1.00)	376 (39.0)	2.29 (0.98)	268 (28.9)	2.02 (1.01)	234 (26.2)	1.94 (1.09)
(6) 社会福祉についての知識・理解がある	60 (6.0)	0.86 (0.93)	126 (13.1)	1.28 (1.07)	54 (5.8)	0.96 (0.92)	59 (6.6)	0.89 (0.98)
(7) 集団でのゲームなどの指導をするのが得意である	131 (13.1)	1.05 (1.15)	172 (17.9)	1.36 (1.22)	105 (11.3)	1.09 (1.08)	98 (11.0)	0.98 (1.14)
(8) 海外のボランティア事情について理解がある	34 (3.4)	0.52 (0.86)	104 (10.8)	0.98 (1.11)	49 (5.3)	0.73 (0.95)	50 (5.6)	0.62 (0.95)
(9) 新しく身につけた学習成果を様々な場で活用したい	223 (22.3)	1.59 (1.21)	243 (25.3)	1.80 (1.17)	158 (17.1)	1.49 (1.10)	177 (19.8)	1.53 (1.23)
(10) 相手の立場に立った行動ができる	175 (17.5)	1.65 (1.05)	227 (23.5)	1.87 (1.01)	155 (16.8)	1.60 (1.01)	147 (16.5)	1.55 (1.06)
(11) ボランティア関連事業を企画・運営する自信がある	40 (4.0)	0.57 (0.87)	82 (8.5)	0.96 (1.08)	45 (4.9)	0.64 (0.91)	37 (4.1)	0.62 (0.91)
(12) 見本を示してわかりやすく解説するのが得意である	80 (8.0)	0.83 (1.03)	121 (12.7)	1.17 (1.12)	70 (7.6)	0.98 (1.01)	72 (8.1)	0.92 (1.05)
(13) 高齢者に対してやさしく接することができる	310 (31.0)	2.00 (1.17)	357 (37.2)	2.12 (1.16)	250 (27.0)	1.92 (1.13)	221 (24.7)	1.75 (1.20)
(14) ボランティアに取り組むことは生きがいの一つである	63 (6.3)	0.76 (1.00)	114 (11.9)	1.11 (1.13)	60 (6.5)	0.82 (0.96)	60 (6.7)	0.82 (1.02)
(15) 様々な国の人々に親切に接することができる	150 (15.0)	1.28 (1.16)	212 (22.0)	1.65 (1.15)	144 (15.6)	1.40 (1.12)	104 (11.7)	1.15 (1.12)
(16) 野外活動についての知識・技能がある	48 (4.8)	0.63 (0.91)	117 (12.2)	1.16 (1.16)	54 (5.8)	0.78 (0.96)	33 (3.7)	0.58 (0.90)
(17) ボランティアの活動分野・領域の広さを知っている	41 (4.1)	0.60 (0.88)	115 (12.0)	1.11 (1.13)	44 (4.8)	0.76 (0.93)	43 (4.8)	0.69 (0.95)
(18) 状況に応じて正しく判断し他者を導くことができる	90 (9.0)	1.07 (1.05)	145 (15.2)	1.42 (1.09)	81 (8.8)	1.15 (0.99)	71 (8.0)	1.02 (0.99)
(19) 国際的な分野で活動・仕事したい	191 (19.1)	1.28 (1.30)	225 (23.5)	1.59 (1.31)	171 (18.6)	1.31 (1.27)	161 (18.0)	1.22 (1.32)
(20) 子どもに対してやさしく接することができる	389 (38.9)	2.13 (1.26)	402 (42.0)	2.25 (1.20)	321 (35.0)	2.04 (1.26)	265 (29.7)	1.86 (1.28)
(21) 人の喜びを自分の喜びとして感じることができる	271 (27.1)	1.85 (1.16)	336 (35.0)	2.07 (1.14)	224 (24.3)	1.84 (1.12)	233 (26.1)	1.79 (1.21)
(22) 自分の知識・技能を他人のために役立てることができる	124 (12.4)	1.32 (1.05)	198 (20.7)	1.66 (1.11)	112 (12.2)	1.39 (1.02)	131 (14.6)	1.29 (1.13)
(23) 言葉がわからなくても身振り・手振りでコミュニケーションできる	191 (19.1)	1.41 (1.20)	238 (24.9)	1.66 (1.21)	162 (17.6)	1.40 (1.18)	142 (15.9)	1.29 (1.19)
(24) ボランティア活動を取り巻く現代的課題について理解がある	52 (5.2)	0.76 (0.96)	110 (11.4)	1.19 (1.09)	51 (5.5)	0.84 (0.95)	57 (6.4)	0.81 (0.97)
(25) ボランティア活動は自分の成長に役立つと感じる	261 (26.1)	1.70 (1.24)	355 (37.0)	2.08 (1.25)	211 (23.0)	1.65 (1.21)	229 (25.6)	1.74 (1.27)
(26) 障害者に対してやさしく接することができる	189 (18.9)	1.57 (1.15)	268 (27.9)	1.92 (1.12)	160 (17.4)	1.58 (1.07)	157 (17.6)	1.51 (1.14)
(27) 人前で自分の意見がはっきり言える	199 (19.9)	1.48 (1.23)	220 (22.9)	1.67 (1.20)	152 (16.6)	1.41 (1.12)	138 (15.4)	1.34 (1.15)
(28) 道具などの使い方を他人に説明するのが得意である	119 (11.9)	1.12 (1.12)	192 (20.0)	1.52 (1.18)	101 (11.0)	1.22 (1.06)	108 (12.1)	1.17 (1.14)
(29) 異国の文化や言語などに興味・関心がある	280 (28.0)	1.70 (1.34)	334 (34.8)	1.96 (1.34)	278 (30.2)	1.74 (1.34)	238 (26.6)	1.66 (1.40)

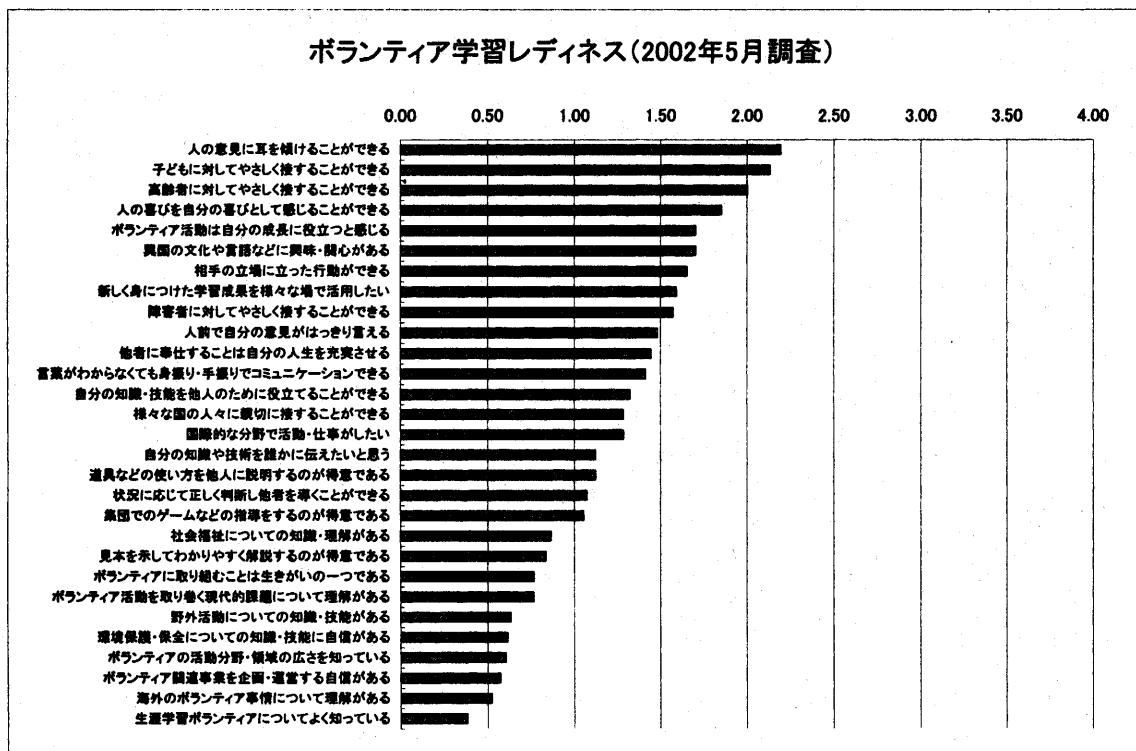


図1 ボランティア学習レディネス(2002年5月調査)

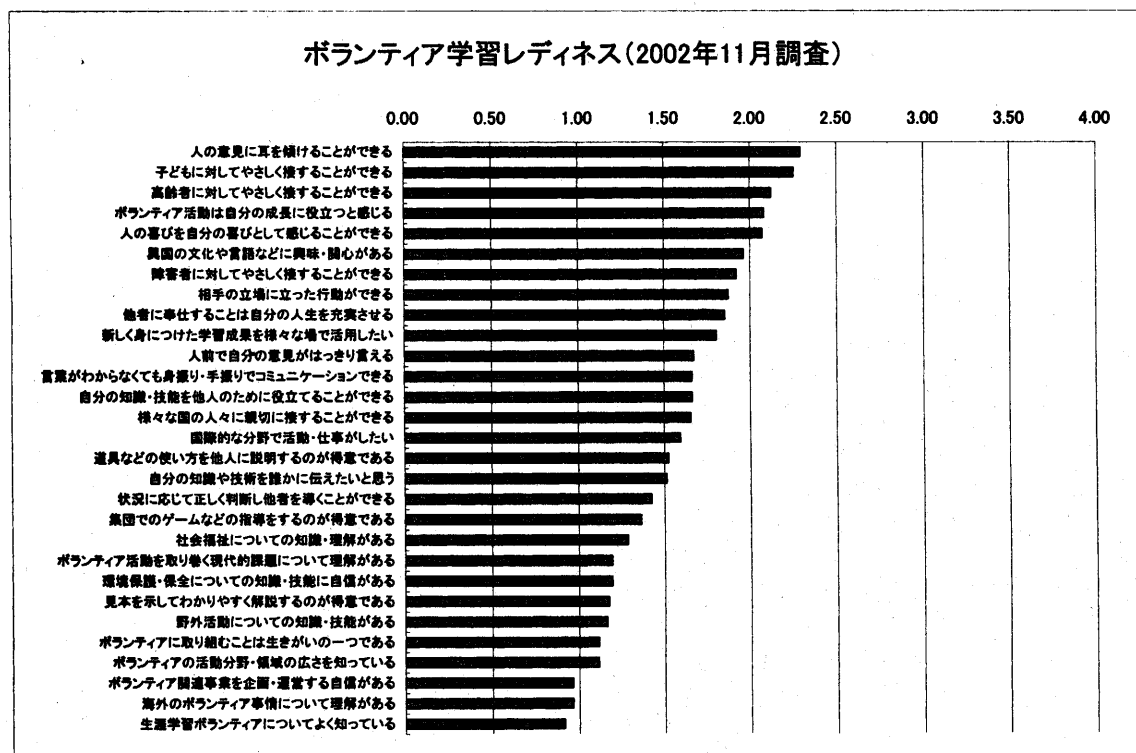


図2 ボランティア学習レディネス(2002年11月調査)

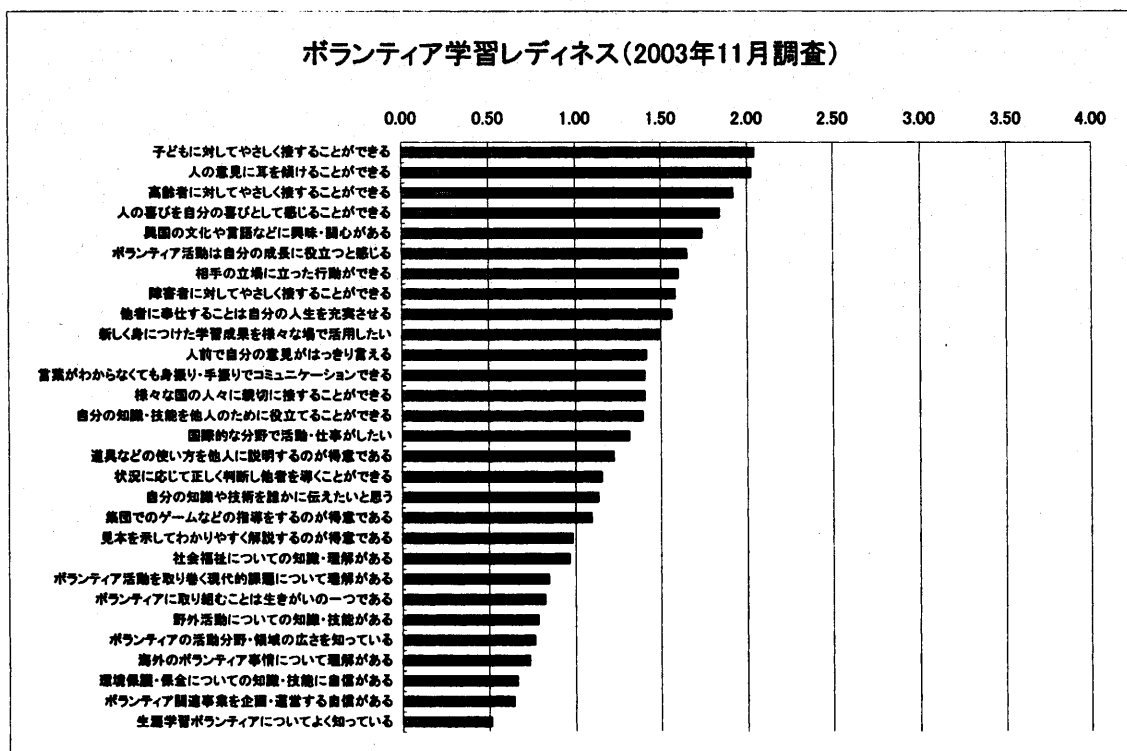


図3 ボランティア学習レディネス(2003年11月調査)

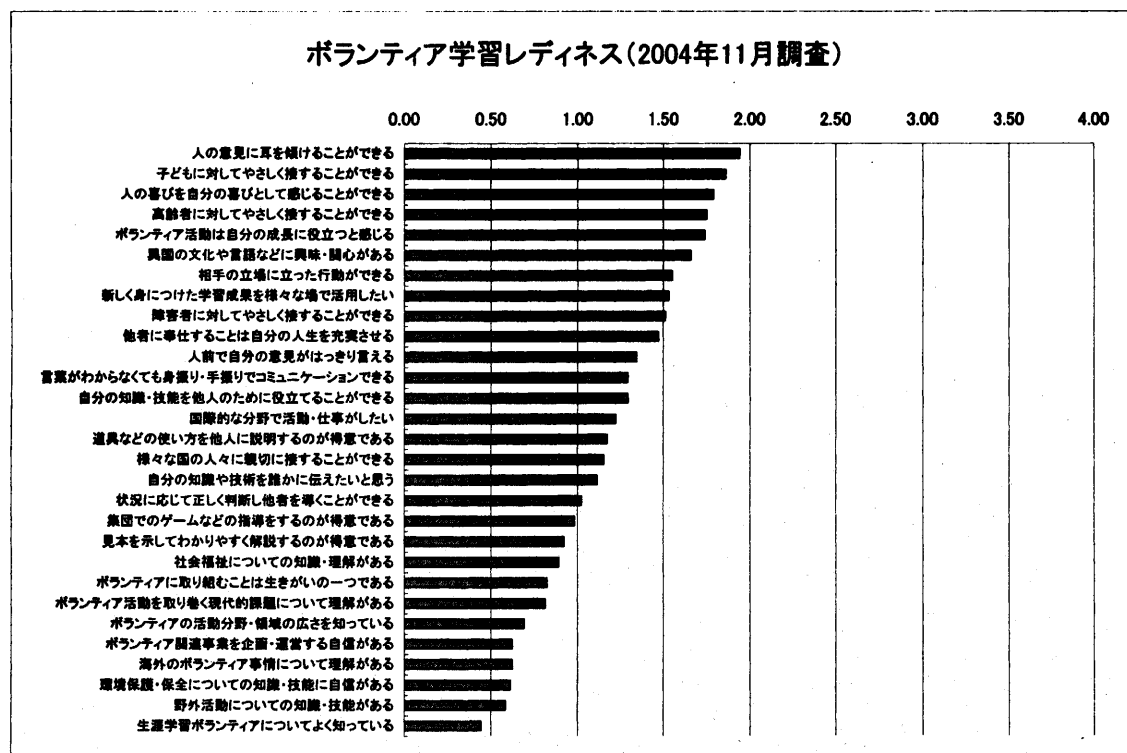


図4 ボランティア学習レディネス(2004年11月調査)

3 ボランティア学習レディネスの変化—因子レベルでの検討—

この29項目の質問項目を用いて因子分析を行い、因子の抽出には最尤法・プロマックス回転、因子数は固有値1.0以上の基準を設け、さらに因子の解釈の可能性も考慮して5因子とした⁽¹⁴⁾。5因子は、「ボランティアの多様性の理解」、「解説技能を伴う指導性」、「コミュニケーションの自信」、「他者理解」、「国際性」であった。これらの因子について、ボランティア学習レディネスの変化をみてみる。

表4 ボランティア学習レディネスの変化(全体)

	(4点満点)							
	2002年5月調査 (n=1001)		2002年11月調査 (n=971)		2003年11月調査 (n=941)		2004年11月調査 (n=879)	
	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)
I. ボランティアの多様性の理解	0.61	(0.63)	1.09	(0.87)	0.73	(0.69)	0.65	(0.72)
II. 解説技能を伴う指導性	1.12	(0.91)	1.43	(0.98)	1.17	(0.89)	1.10	(0.95)
III. コミュニケーションの自信	1.90	(1.01)	2.10	(0.97)	1.85	(1.00)	1.71	(1.07)
IV. 他者理解	1.81	(0.87)	1.99	(0.83)	1.70	(0.85)	1.67	(0.93)
V. 国際性	1.49	(1.18)	1.77	(1.19)	1.53	(1.20)	1.44	(1.25)

全体の結果からみると、2002年5月調査では、「コミュニケーションの自信」(1.90点)の得点が最も高く、以下、「他者理解」(1.81点)、「国際性」(1.49点)、「解説技能を伴う指導性」(1.12点)、「ボランティアの多様性の理解」(0.61点)であった。2002年11月調査では、「コミュニケーションの自信」(2.10点)の得点が最も高く、以下、「他者理解」(1.99点)、「国際性」(1.77点)、「解説技能を伴う指導性」(1.43点)、「ボランティアの多様性の理解」(1.09点)であった。2003年11月調査では、「コミュニケーションの自信」(1.85点)の得点が最も高く、以下、「他者理解」(1.70点)、「国際性」(1.53点)、「解説技能を伴う指導性」(1.17点)、「ボランティアの多様性の理解」(0.73点)であった。2004年11月調査では、「コミュニケーションの自信」(1.71点)の得点が最も高く、以下、「他者理解」(1.67点)、「国際性」(1.44点)、「解説技能を伴う指導性」(1.10点)、「ボランティアの多様性の理解」(0.65点)であった。

このように、4回の調査とも、「コミュニケーションの自信」、「他者理解」、「国際性」、「解説技能を伴う指導性」、「ボランティアの多様性の理解」の順で得点が高かった。また、各因子の得点の変化をみると、項目レベルで検討した際と同様、2002年11月調査の得点が最も高く、2003年11月調査では得点が下がり、2004年11月調査ではさらに低下していた。項目レベルで検討した際には、項目によってばらつきがあったが、因子レベルでみると、変化の仕方がより明確になった。なお、2002年5月調査の得点は、因子によって異なり、「ボランティアの多様性の理解」は2004年11月調査より低く、「解説技能を伴う指導性」と「国際性」は2003年11月調査と2004年11月調査の中間にあり、「コミュニケーションの自信」と「他者理解」は2002年11月調査に次ぐ高さの得点であった。得点の増減の仕方に着目すると、最高得点と最低得点の差に関して、「コミュニケーションの自信」が0.39点差、「他者理解」が0.32点、「国際性」が0.33点、「解説技能を伴う指導性」が0.33点、「ボランティアの多様性の理解」が0.48点であった。

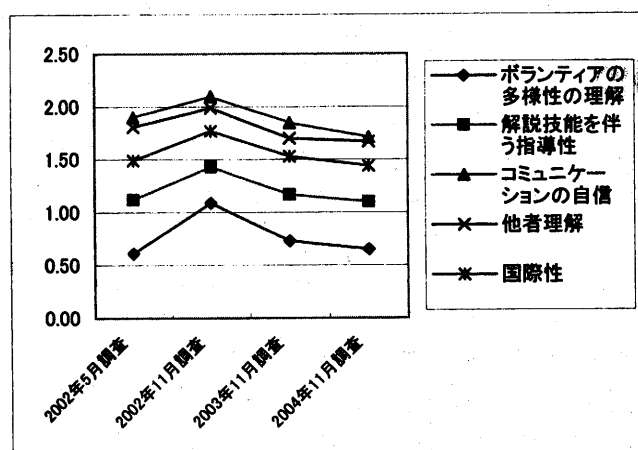


図5 ボランティア学習レディネスの変化(全体)

表5 ボランティア学習レディネスの変化(男子)

	(4点満点)							
	2002年5月調査 (n=501)		2002年11月調査 (n=437)		2003年11月調査 (n=370)		2004年11月調査 (n=346)	
	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)
I. ボランティアの多様性の理解	0.58	(0.64)	1.12	(0.90)	0.77	(0.73)	0.73	(0.80)
II. 解説技能を伴う指導性	1.13	(1.11)	1.47	(0.99)	1.19	(0.93)	1.10	(0.95)
III. コミュニケーションの自信	1.80	(1.04)	2.04	(1.06)	1.77	(1.05)	1.57	(1.12)
IV. 他者理解	1.79	(0.91)	2.02	(0.88)	1.72	(0.92)	1.67	(0.98)
V. 国際性	1.32	(1.15)	1.63	(1.19)	1.36	(1.15)	1.24	(1.22)

表6 ボランティア学習レディネスの変化(女子)

	(4点満点)							
	2002年5月調査 (n=482)		2002年11月調査 (n=441)		2003年11月調査 (n=371)		2004年11月調査 (n=348)	
	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)
I. ボランティアの多様性の理解	0.63	(0.62)	0.99	(0.79)	0.70	(0.61)	0.53	(0.56)
II. 解説技能を伴う指導性	1.11	(0.90)	1.33	(0.94)	1.16	(0.81)	1.08	(0.89)
III. コミュニケーションの自信	2.03	(0.98)	2.12	(0.88)	1.97	(0.93)	1.87	(1.00)
IV. 他者理解	1.83	(0.82)	1.92	(0.79)	1.68	(0.73)	1.73	(0.84)
V. 国際性	1.66	(1.19)	1.86	(1.19)	1.69	(1.21)	1.63	(1.28)

次に、男女別に結果をみている。項目レベルでは、項目数が多く、それに男女別の観点から検討を加えると焦点が絞りにくくなるため、ここで因子レベルでの比較検討を行うこととする。

男女別にみても、全体の傾向と概ね同様であった。2002年5月調査から2002年11月調査にかけて得点が大きく向上し、その後、2003年11月調査、2004年11月調査と、調査が進むに伴って徐々に得点が低下していた。ただ、その得点の変化の仕方に、男女で違いがあった。詳細はこの後に述べるが、男子は、得点の上がり方・下がり方がともに大きく変化するのに対して、女子は、得点の増減の幅が比較的小さかった。

では、各因子ごとに、男女別の得点がどのように変化しているのかをみている。

「ボランティアの多様性の理解」についてみると、2002年5月調査では、女子の得点が高かったが、2002年11月調査以降は、男子の得点の方が高くなった。得点の増減に着目すると、男子では0.58点～1.12点(0.54点差)、女子が0.53点～0.99点(0.46点差)で、この因子に関しては、男女とも増減の幅がやや大きかった。また、2002年5月調査と2004年11月調査を比較すると、男子では0.15点増加していたのに対して、女子は0.10点減少しており、2004年11月調査で男女間の得点差(0.20点差)が最も大きくなった。

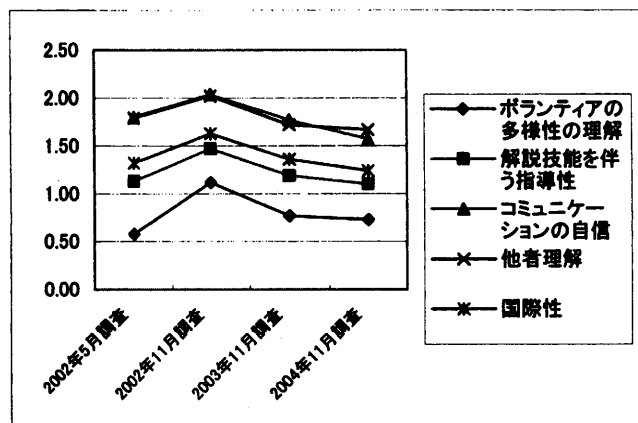


図6 ボランティア学習レディネスの変化(男子)

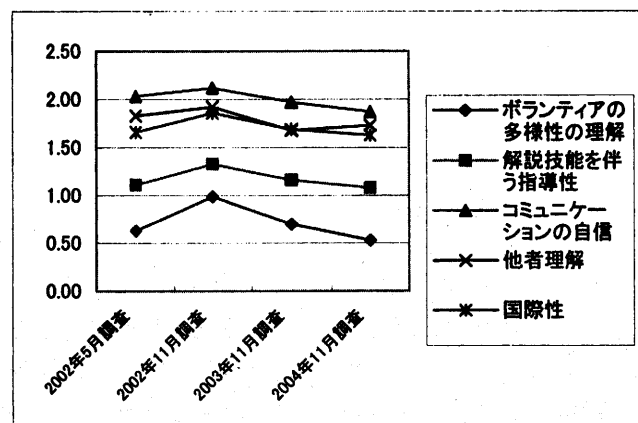


図7 ボランティア学習レディネスの変化(女子)

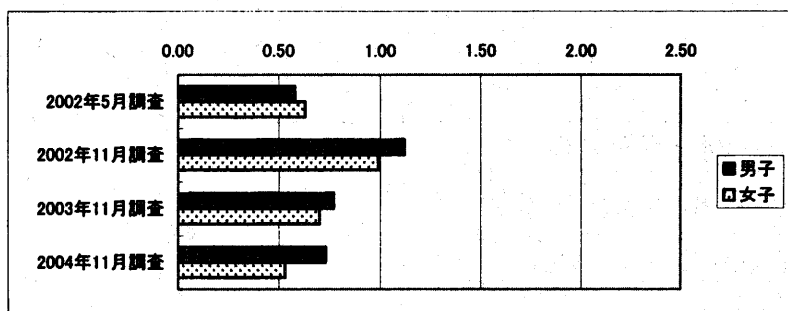


図8 男女別「ボランティアの多様性の理解」の変化

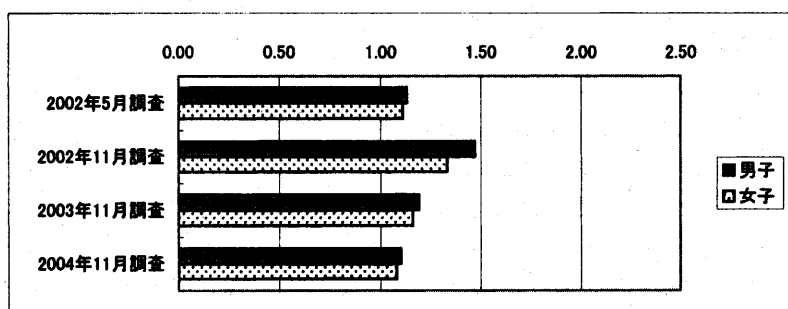


図9 男女別「解説技能を伴う指導性」の変化

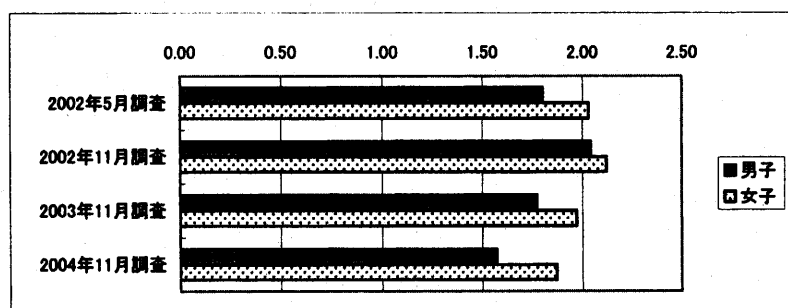


図10 男女別「コミュニケーションの自信」の変化

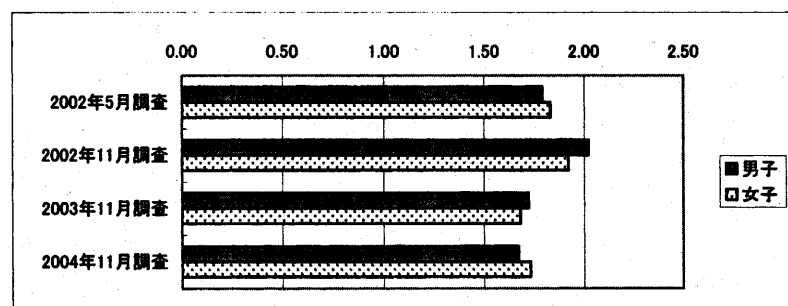


図11 男女別「他者理解」の変化

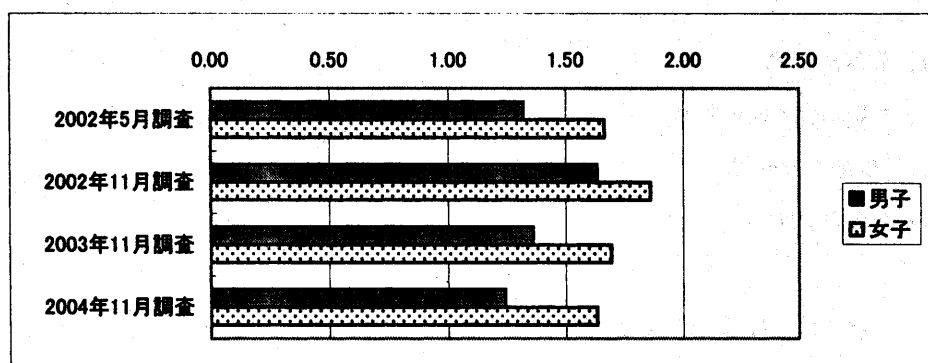


図12 男女別「国際性」の変化

「解説技能を伴う指導性」では、4回の調査を通して、一貫して男子の得点の方が高かった。得点の増減では、男子が1.10点～1.47点（0.37点差）、女子が1.08点～1.33点（0.25点差）で、男子の増減幅がやや大きかった。また、2002年11月調査で男女間の得点差（0.14点差）が比較的大きくなったが、それ以外の調査では、得点差が0.02点～0.03点となっており、男女ともほぼ同様の変化を示した。

「コミュニケーションの自信」では、4回の調査すべてにおいて女子の得点が一貫して高かった。得点の増減では、男子が1.57点～2.04点（0.47点差）、女子が1.87点～2.12点（0.25点差）で、男子の増減幅が大きかった。また、2002年11月調査では男女の得点差（0.08点差）は小さかったが、それ以外の調査では、0.20点～0.30点差となっており、その差が比較的大きかった。なお、最も大きく点差が開いたのは、2004年11月調査の0.30点差であった。

「他者理解」については、2002年5月調査と2004年11月調査では女子の得点が高く、2002年11月調査と2003年11月調査では男子の得点が高かった。得点の増減では、男子が1.67点～2.02点（0.35点差）、女子が1.68点～1.92点（0.24点差）で、男子の増減幅がやや大きかった。また、男女とも、2002年11月調査の得点をピークにしているのは他の因子と同様であるが、女子の2004年11月調査の得点の表れ方がやや異なる。女子に関して、他の4因子は、2003年調査11月調査より2004年11月調査の得点が下がっているのに対して、「他者理解」に関しては、2004年11月調査にかけて得点が向上していた。それから、4回の調査における男女の得点差は0.04点～0.10点で、他の因子と比べてその差が小さかった。

「国際性」に関してみると、4回の調査を通して、一貫して女子の得点が高く、その得点差も比較的大きかった（0.23～0.39点差）。女子の得点の変化を見ると、1.63点～1.86点（0.23点差）の範囲内の増減で、その幅は比較的小さいのに対して、男子の場合は、1.24点～1.63点（0.39点差）で、その増減幅がやや大きかった。

IV 分析・考察

1 ボランティア学習レディネスの経年変化の解釈

これまでの結果から、2002年11月調査の得点が最も高いことが明らかになった。すなわち、高校1年生の5月（春）から11月（秋）にかけて大きく向上して、その後は緩やかに、高校2年生の11月（秋）、高校3年生の11月（秋）と調査が進むに伴って得点が低下した⁽¹⁵⁾。

高校生という発達段階は、ハヴィガーストの分類に即して捉えると⁽¹⁶⁾、青年期に該当し、その発達課題としては、「市民として必要な知識と態度を発達させること」や「社会的に責任のある行動を求め、そしてそれをなすこと」等が例示されている。そのような段階にある高校生であるが、その実情はどうなっているのだろうか。その一端として、学習塾にかかる費用をみると、公立・私立とも学年進行に伴って上昇していることが示されている（例えば、公立の場合、1年生：52,366円、2年生：58,049円、3年生：109,593円）⁽¹⁷⁾。あるいは、完全学校週五日制が定着している中、土曜日にしたこととして、「勉強をしに、学校へ行った」29.3%、「部活動をしに、学校へ行った」21.0%という結果が出ている⁽¹⁸⁾。また、部活動に関してみると、月曜日から金曜日まで

5日間にわたって部活動をしているのが61.9%となっている⁽¹⁹⁾。このような現状をみると、総じて、学習塾や部活動に忙しいという高校生像が浮かび上がってくる。

また、調査協力校の教師を対象に自由記述式の質問紙調査を実施したところ、高校1年生の5月（春）から11月（秋）にかけて大きく向上して、その後は緩やかに、高校2年生の11月（秋）、高校3年生の11月（秋）と調査が進むに伴って得点が低下したという結果について次のような解釈が寄せられた。

- 当然の結果ではないでしょうか。特に進学者の多い高校では、学年が上がる毎に、生徒の自由な時間、授業の余裕などどんどん減ります。ボランティアへの興味・関心が失せても仕方がないと思います。
- 実際に3年間ボランティア活動に参加している生徒（個別ではなく）集団を見ると、上のような傾向は、現場として感じられない。現在高校生の中にボランティアをしたい生徒は、数多くいるが、社会に受け皿がないことが、一番の問題だと考えている。
- ボランティアをするためのゆとりや社会の受け皿が欠如していると思う。
- 1つは受験が近づくこと → 勉強すればあとは何もしなくてよいという風潮。他は、家族、地域とのコミュニケーション不足あるいは両者のボランティアへの関心の低さ。
- ボランティア活動以外のことに興味・関心が向くようになるからではないかと思います。逆から言えば、ボランティア活動に参加した高校生が、そのボランティアに面白味を感じなくなるということではないでしょうか。
- 年次が進行するにつれ、自分の学習や部活で、自分のことだけで、手一杯の状況である。学校でもボランティアについて触れることはほとんどなく、関心が薄れてしまう。
- 自分の将来を考え、決めていく段階が近づくにつれ、自分のことを考えることが多くなるからであろう。日本の子育ても含め、ボランティア自体の理解も心の育成もできる社会体制となっていないからである。

高校生の現状やこれらの記述から考察すると、高校1年生の5月（春）から11月（秋）にかけて大きく向上して、その後は緩やかに、高校2年生の11月（秋）、高校3年生の11月（秋）と調査が進むに伴って得点が低下したことには、大きく3つの要因が挙げられるものと思われる。第一は、受験である。本研究の調査協力校のような進学校に所属する高校生にとって、受験の存在は大きく、それがより身近になればなるほど強く意識するようになるのは自然のことである。ベネッセの調査では、高校生が「ボランティア活動、奉仕活動に参加すること」を「とても大事」と回答した割合が14.8%であるのに対して、「勉強をすること」が「とても大事」と回答した割合が31.5%である⁽²⁰⁾とされており、この結果もそれを裏付けていると言えよう。学年進行に伴って受験の占めるウェイトが高まれば、ボランティア学習とは疎遠になりやすいであろう。疎遠になればそれだけボランティア学習に対する興味・関心も含めたレディネスも低下するのではないかと考えられる。第二は、興味・関心の拡散である。受験も含めてであるが、学年進行に伴い、部活動や個人的な習いごと、興味・関心を反映した学校外での活動、あるいはアルバイトなど、周囲を取り巻く様々な物事や出来事に目が向くようになったのではないかとと思われる。ベネッセの調査では、高校生について、「いろいろなことに好奇心が旺盛である」という項目に関して、「とてもそう」と「ややそう」という回答を合計した割合が、わずかであるが、学年進行に伴って増加している⁽²¹⁾（1年生：73.0%、2年生：73.8%、3年生：75.4%）とされており、そのことからその一端がうかがい知れよう。高校受験を経て、入学して間もないころはそれほど興味・関心が拡散しておらず、言うなれば選択肢が少ない中で提示されたボランティア学習と、高校生活にも慣れて、自分の周りの動向も把握でき、選択肢が多くなった中でのボランティア学習とを比較すると、後者では相対的にその位置づけが低下しているものと思われる。それに伴って、ボランティア学習レディネスも低下したものと考えられる。第三は、社会体制である。冒頭でも少し触れたが、いくら文部科学省や都道府県、市区町村が様々なボランティア振興策を積極的に展開しても、それが学校教育の現場レベルまでは浸透していないのではないかとと思われる。学校も含めて地域社会、あるいは家庭においても、文部科学省等が想定しているより、ボランティアに関する理解が高くはなく、高校生が興味・関心を示しても、それに対応できていないという実情があるのではないだろうか。そうした社会の意識・実態が垣間見られるものとして、ボランティア休暇・休職制度の導入状況をみても、「休暇制度あり」7%、「休職制度あり」5%となっている⁽²²⁾。このようなボランティア学習を取り巻く社会的機運・体制との関連において、社会人に限らず、高校生についても、学習したくてもできなければ、いくらボランティア学習レディネスがあっ

たとしても向上することはなく、時間の経過とともに
ボランティア学習レディネスも低下することになったのではないかと考えられる。

2 3年間で変化するレディネス・変化しないレディネス

ボランティア学習レディネスの中身・内容の変化の仕方に違いがみられた。因子レベルで検討した際、4回の調査の得点の増減について、最高点と最低点の得点差に着目した場合、「ボランティアの多様性の理解」の差が比較的大きく、「コミュニケーションの自信」がそれに次いでやや大きかった。「解説技能を伴う指導性」、「他者理解」、「国際性」の増減は比較的小さかった。

この結果に関して、「ボランティアの多様性の理解」は、1年生の5月時点で得点が最も低かったため、その分だけ大きく向上する可能性があったものと思われる。得点がもともと低いものは、得点そのものは大きくなくとも、変化という側面から捉えれば、大きく変化するものであるといえる。「コミュニケーションの自信」は、5因子の中で、一貫して最も得点が高かった。それだけに、その状態を維持することが難しく、各回の調査において相対的にはそれほど低い得点でなくとも、少し得点が下がっただけで、一見すると大きく低下したようになり、増減幅がやや大きくなったものと考えられる。

これらは、ボランティアセミナーやボランティア研修等を受けていない高校生の変化である。入学当初は「ボランティアの多様性の理解」のように専門的な知識・理解に関してレディネスが不十分であっても、学年進行に伴い大きく向上し得る側面であると捉えられる。また、「コミュニケーションの自信」のように対人関係については、レディネスがすでに高く、それだけに、それをさらに向上させる、または3年間維持することはなかなか困難であるのかもしれない。他方、「解説技能を伴う指導性」、「他者理解」、「国際性」については、4回の調査を通して、変化は見られるものの比較的小さいものであり、取り立てて大きな変動のない安定したレディネスであると考えられる。

3 レディネスの変化の捉え方—男女比較に基づく検討—

男女比較をした際に、その得点の増減の仕方に特徴があった。男子は、得点の上がり方と下がり方がともに大きく変化したのに対して、女子は、得点の増減の幅が男子と比較して小さかった。

繰り返しになるが、今回の結果はボランティアセミナーやボランティア研修等を受けていない高校生の変化である。ボランティアに関する特別な学習を行っていない状況下で、男子は、「ボランティアの多様性の理解」、「コミュニケーションの自信」、「解説技能を伴う指導性」、「他者理解」、「国際性」といった側面で大きく向上するが、その分低下の仕方も大きい。他方、女子は、「ボランティアの多様性の理解」については男子と同様の傾向であるが、他の因子については、変化は見せるもののその増減幅は比較的小さく、安定していると捉えることができる。

この結果から、男子に対しては、特別な学習を仕掛けなくても1年生の11月（秋）までは諸側面で向上が期待できる。しかし、その一方で、その後の低下の仕方も大きい。そこで、1年生の11月（秋）以降にボランティア学習レディネスを促すような学習機会を提供することで、低下の幅が小さくなるのではないかと考えられる。また、女子に関して、特別な学習をしていない状態でレディネスの変化が小さいということから、何らかの学習機会を提供することによってその変化が大きくなるのではないと思われる。ただし、その変化が、向上するのか低下するのかは、学習機会の提供の仕方による部分が大きいであろう。極端に言えば、何も学習しなかった方が、低下の幅が小さかったということにもなりかねない。これは、男子の場合も同じである。いずれにせよ、学習機会を持つ際には十分な検討が必要であるが、その時期としては1年生の11月（秋）以降であると考えられる。

V おわりに

最後に、これまでのレディネスに着目した検討を踏まえ、効果的に高校生のボランティア学習を進めるための提言を行ってまとめに代える。

第一は、ボランティア学習の仕掛け時である。学年進行によって、あらゆるレディネスが向上すればよいのであるが、必ずしもそうではない。様々な要因によって、1年生の5月（春）から11月（秋）にかけては諸側面の

レディネスが向上するが、高校1年生の11月（秋）を境にして、それ以降は低下の一途をたどる。入学当初の1年生5月（春）よりも、卒業間近にある3年生11月（秋）のレディネスの方が低い場合もある。そこで、ボランティア学習を仕掛ける時期は、1年生の11月（秋）というのがポイントになり、そこでの成果をいかにレディネスの向上、もしくは維持につなげるかが重要になるであろう。

第二は、ボランティア学習の内容である。もともと高い得点を示すレディネスもあれば、低い得点のレディネスもある。具体的には、コミュニケーションや他者との関わりに関するものについては、比較的高いが、ボランティアの多様性に関する知識・理解は低い。対人関係を深める体験は、道徳や特別活動を中心とした小中学校の学校教育において実践してきていると思われるので、その蓄積、積み上げてきたものを、高校3年間で向上、もしくは最低限維持することが必要になる。他方、ボランティアの多様性も含めて、国際性など、専門的な知識・理解に関しては、それまでの学習機会が十分であったとはいえないであろう。それだけに、高校生という発達段階やその興味・関心に合わせた学習を展開することで、専門性に関わるレディネスが大きく維持・向上する可能性があるものと考えられる。

第三は、男女の特性の考慮である。レディネスに関して、男子は変化の幅が大きいのにに対して、女子は小さかった。ボランティア学習の機会を与えることで、これがどのように変わるかは判断できない。レディネスの変化が大きい男子には、表面的な学習ではなく、比較的影響のある学習が必要になるかもしれない。他方、レディネスの変化が小さい女子は、それほどインパクトの強くない学習で、レディネスが大きく変わるかもしれない。いずれにせよ、発達段階によって向上するレディネスは、適切な時期までそのままにしておき、学習機会を提供する段階になったら、その質・量とも慎重に検討を重ねて提供する必要があるものと思われる。

Ⅵ 註記・引用文献

- (1) 内閣府、『青少年白書（平成17年版）』、独立行政法人国立印刷局、2005、p.75
- (2) 文部科学省、『データからみる日本の教育2005』、独立行政法人国立印刷局、2005、p.17
- (3) 国立淡路青年の家、『ボランティア活動セミナー 報告書』、2001
- (4) 東大阪市ボランティアセンター、『ボランティアの意識についての調査報告書』、2002
- (5) 独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター・青少年教育施設におけるボランティア学習プログラムの在り方に関する調査研究協力者会議、『青少年のボランティア学習プログラムの在り方に関する調査研究報告書』、2003
- (6) 坂本昂・東洋編、『学習心理学』、新曜社、1977、pp.136-138
- (7) 辰野千寿、『学習心理学総説』、金子書房、1973、p.259
- (8) 羽生義正編、『現代学習心理学要説』、北大路書房、1988、pp.186-187
- (9) 最近の研究動向をみると、学習の要因に比重を置いているものが多いようである。内容的には、大学生や高校生の職業レディネスや大学生の情報社会・教育レディネス、幼少児や障害児の教科学習レディネスを扱ったもの等が散見される。
 - ・水野りか、「心理学科新入生のコンピュータ・レディネスの縦断比較」、『中部大学人文学部研究論集』第13号、2005、pp.17-35
 - ・中西裕、「情報教育を通じた「社会人へのレディネス」育成—e-learningの目的と手法への一提言—」、『戸板女子短期大学研究年報』第46号、2004、pp.65-78
 - ・伊田勝憲、「教員養成課程学生における自律的な学習動機づけ像の検討—自我同一性、達成動機、職業レディネスと課題価値評定との関連から—」、『教育心理学研究』第51巻第4号、2003、pp.367-377
 - ・森敏昭・清水益治・石田潤・富永美穂子、「大学生の自己教育力と情報活用の実践力および情報化社会レディネスとの関係」、『広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部（学習開発関連領域）』、第52号、2003、pp.1-8
 - ・志村結美、「日本とアメリカの高校生の経済的自立意識と職業レディネス」、『家庭科教育』第77巻第9号、2003、pp.24-30
 - ・高良美樹・金城亮、「インターンシップの経験が大学生の就業意識に及ぼす効果—職業レディネスおよび進

- 路選択に対する自己効力感を中心として」、『琉球大学法文学部人間科学科紀要 人間科学』第8号、2001、pp.39-57
- ・丸山美和子、「教科学習のレディネスと就学期の発達課題に関する一考察」、『佛教大学社会学部論集』第32号、1999、pp.195-208
 - ・湯川隆子、「レディネスからみた家庭科における技能学習」、『三重大学教育学部研究紀要（教育科学）』第38巻、1987、pp.267-276
 - ・佐藤誠、「心身障害児における学習レディネスに関する心理学的研究－障害別・発達の比較による－」、『日本大学人文科学研究所研究紀要』第31号、1985、pp.199-222
 - ・若林満・後藤宗理・鹿内啓子、「職業レディネスと職業選択の構造－保育系、看護系、人文系女子短大生における自己概念と職業意識との関連－」、『名古屋大学教育学部紀要－教育心理学科－』第30巻、1983、pp.63-98
- (10) 前掲(9)
 - (11) 3校の詳細については、下記の論文を参照されたい。
林幸克、「高校生のボランティア学習に適した情報収集方法と活動時間帯－他者から受ける影響に着目した検討－」、『法政大学大学院紀要』第55号、2005（印刷中）
 - (12) 林幸克・谷井淳一、「青少年教育施設におけるボランティア研修会の効果に関する検討」、『国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』創刊号、2001、pp.9-19
 - (13) 林幸克、「高校生のボランティア学習に対するレディネス－中学時代の所属部・クラブ活動との関係に関する一考察」、『日本特別活動学会紀要』第13号、2005、pp.65-74
 - (14) 前掲(13)
 - (15) 高校1年生11月時点での調査結果の得点がピークであったことに関して、それを解釈する上での留意点を確認しておきたい。3年間で4回という限られた調査から得られた結果であるため、厳密に1年生の11月がピークであるとは断言できない。すなわち、1年生の11月という時期に絶対的な意味があるというわけではない。調査の頻度を多くすればボランティア学習レディネスの変化について、変化の動きをより詳細に掌握できるものと考えられる。1年生の11月前後やまったく別の時期に意味ある変化がみられたかもしれない。あるいは、1年間の季節変動も含めたライフサイクル等による効果・影響も勘案すべきかもしれない。こうした諸課題の存在を踏まえた上で、本稿では、限られた調査結果から分析・考察がなされていることを付記する。
 - (16) R・J・ハヴィガースト（莊司雅子監訳）、『人間の発達課題と教育』、玉川大学出版部、1995
 - (17) 文部科学省、『平成14年度 子どもの学習費調査』、2003
私立の場合、1年生：74,430円、2年生：82,491円、3年生：171,635円となっている。ちなみに、学校外の活動費として、体験・地域活動にかかる費用は、同じく私立では、1年生：10,595円、2年生：7,610円、3年生：5,905円となっており、学年進行に伴って、その額は減少していた。
 - (18) ベネッセ未来教育センター、『高校生にとっての土曜日－「完全学校週5日制」のもたらしたもの－』（モノグラフ・高校生VOL.68）、2003
 - (19) 子どもの体験活動研究会、『「完全学校週5日制」の下での地域の教育力の充実に向けた実態・意識調査」報告書』、2003
 - (20) ベネッセ教育研究所、『まじめさの構造－外見で判断しないでほしい－』（モノグラフ・高校生VOL.65）、2002
 - (21) 前掲(18)
 - (22) 財団法人勤労者リフレッシュ事業振興財団・勤労者ボランティアセンター、『企業と勤労者がつくる21世紀のボランティア新時代－企業の社会貢献活動および従業員のボランティア活動支援に関する調査報告書－』、2002

Ⅶ 参考文献

- ・波多野完治・依田新・重松善蔵監修、『学習心理学ハンドブック』、金子書房、1968
- ・国立オリンピック記念青少年総合センター、『事業効果測定のための調査票とその利用法－主催事業評価の方法としての参加者の変容測定方法の開発に関する調査研究報告書－』、2001
- ・林幸克・谷井淳一、「青少年のボランティア意識の構造に関する研究－ボランティア研修の今後の方向性についての検討－」、『日本生涯教育学会論集』22、2001、pp.145-155
- ・麻生誠・堀薫夫、『生涯発達と生涯学習』、財団法人放送大学教育振興会、1997
- ・エーリッヒ・フロム（小此木啓吾監訳）、『よりよく生きるということ』、第三文明社、2000
- ・西平直喜・吉川成司編著、『自分さがしの青年心理学』、北大路書房、2000